

特別展「開山国師生誕750年記念 國泰寺宝物展」出品目録

〔会期：令和6年(2024)7月27日(土)～10月6日(日)〕

富山県高岡市太田の國泰寺（臨濟宗國泰寺派大本山）は、正安元年(1299)に慈雲妙意（清泉禪師。1274～1345）が二上山中に開いた摩頂山東松寺を起源としている古刹です。令和6年(2024)は開山国師・慈雲妙意（清泉禪師）生誕750年の節目にあたります。本展では國泰寺に伝わる古文書をはじめ、書画、調度品等の資料を展示・紹介します。本展開催にあたりご所蔵資料を多数ご出品いただきました國泰寺管長・澤大道様をはじめ、同寺関係各位の皆様に厚く感謝申し上げます。

No.	資料名称	年代	点数	備考
1	康運作《開山国師座像》（複写）	16世紀（座像）	1	國泰寺開山・慈雲妙意（清泉禪師。1274～1345）の木彫像（頂相）。康運は天文期(1532～55)に活躍した京都の仏師。鎌倉期の仏師・運慶の子孫。2017年の調査で、首柄(ほぞ)の内側に「運慶子孫七条大仏師法印康運作」等の墨書が発見された。「大本山國泰寺繪葉書」（発行・國泰寺。1977～97年。当館蔵）より
2	《絹本着色開山国師頂相》	明治6年(1873)	1	國泰寺開山・慈雲妙意（清泉禪師。1274～1345）の頂相（肖像画）。法橋栄賢筆、独園承珠賛。独園は臨濟宗相国寺第126世住職
3	『越中射水郡摩頂山國泰禪寺開山塔司弘源院中興記併碑銘』	宝暦14年(1764)	1	國泰寺開山・慈雲妙意（清泉禪師）の略伝、同寺由緒などが漢文で記されている。夕照書。校正もされ、稿本と思われる
4	『特賜恵日聖光国師経歴録』	明治27年(1894)3月写	1	國泰寺開山・慈雲妙意(1274～1345)の経歴の写し。弘源寺春峰写
5	「当寺并末寺由来帳」	文化3年(1806)4月	1	國泰寺とその末寺の由来（由緒）帳。本書には國泰寺のほか、末寺（加賀金沢3ヶ寺、能登6ヶ寺、越中砺波郡2ヶ寺、同射水郡4ヶ寺）計15ヶ寺の情報が記載されている
6	《紙本着色 法灯国師頂相》	文政2年(1819)	1	臨濟宗法灯派の祖。法灯円明国師〔無本（心地）覚心。1207～98〕は、國泰寺開山・慈雲妙意の師。現和歌山県由良町に興国寺を開いた。中国・宋から虚無僧や尺八で知られる普化宗や金(徑)山寺味噌や醤油を伝えたという。賛は國泰寺第48世・定海宜精
7	《絹本着色 天英清竺頂相》	正徳5年(1715)	1	國泰寺第37世・天英清竺の肖像画（自賛）。宝永5年(1708)天英は、將軍・徳川綱吉から法灯派の大本山を称すること、住職・將軍交代の際は將軍への「お目見得」を行うことを許された
8	伝後醍醐天皇 勅宣	正慶2年(1333)5月晦日	1	第96代後醍醐天皇(1288～1339)の命令を伝える宣旨。天皇の近臣で蔵人頭・藤原行房から現兵庫県出身の赤松次郎入道(赤松円心)宛。太刀一振と馬5匹を下賜して、禁門警護を命じている。寛政2年(1790)9月付で水間嘉平による鑑定書が付属している
9	伝後醍醐天皇御真筆 和歌断簡		1	後醍醐天皇(1288～1339)御真筆と伝わる和歌断簡。『新古今和歌集』に収録。〔右〕「山人のおる袖にほふきく(菊)のつゆ(露)／うち(打)はらふにも千代はへぬへ(べ)し」（藤原俊成）。〔左〕「神無月もみち(紅葉)もし(知)らぬときわ(常盤)木に／よろつよ(万代)かか(懸)れみね(峰)の白雲」（清原元輔）
10	箱香炉		1	箱書きや宝物台帳によると、後醍醐天皇第八皇子・成良(宗良カ)法親王から随従の北面武士・八坂帯刀に下賜されたものと伝わる。その後も、子孫の高岡伏木の廻船問屋・八坂家に代々伝えられ、明治17年(1884)に國泰寺に寄付されている
11	伝後村上天皇御宸翰	〔南朝〕興国3年(1342)8月	1	嘉暦2年(1327)、慈雲妙意は南朝・後醍醐天皇の帰依を得て「清泉禪師」の号を賜った。興国3年には南朝2代の後村上天皇から父・後醍醐天皇の肖像画と、「臨幸に代える」とあるこの宸翰を賜った
12	伝光明天皇御真筆	〔北朝〕康永2年(1343)3月	1	慈雲妙意が北朝2代・光明天皇から賜った御真筆（三社託宣）。本宝物は文化12年(1815)12月に國泰寺第48世・定海宜精、明治13年(1880)同寺54世・越叟義格の両管長時に修復された
13	後奈良天皇御真筆 和歌短冊	天文15年(1546)10月	2	國泰寺第27世・雪庭に賜った後奈良天皇の御真筆。「音羽やま(山)さやかにみ(見)する白雪を／明ぬとつく(告)ぐる鳥のご(声)かな」（高倉院）。「今朝よりや春はき(来)ぬらむあら(新)玉の／としたち(年立)かへりかす(霞)む空かな」（二条為世）

No.	資料名称	年代	点数	備考
14	後奈良天皇御真筆 和歌懐紙		1	後奈良天皇(1496~1557)御真筆による和歌懐紙(歌会で和歌を清書する紙)。「詠春松寿齡/和歌/二葉よりちとせ(千歳)や/こもる松か(が)枝のむ/につくろふ春のみ/とりは(緑)」。明治17年(1884)、伏木町・八坂金平より寄贈
15	前田利家安堵状(國泰寺納所宛)	天正13年(1585)閏8月11日付	1	二上山中の城山にある守山城修築のため、國泰寺方丈(お堂)は徴用するが、他の小寺・山林は従来通り安堵(保障)するというもの。この1ヶ月後、前田家2代利長が守山城主となる。高岡市指定文化財
16	前田利光安堵状(國泰寺惣中宛)	慶長19年(1614)8月25日付	1	利光は前田家3代当主(1629年に利常と改名)。國泰寺居屋敷、田、山林、竹木などを従来どおり保障するというもの
17	靈芝天然如意		1	如意は僧が説法の際に持つ仏具。宋の無門慧開(1183~1260)から建長元年(1249)に法灯国師に授けられ、その後法灯国師から慈雲妙意へ授与されたものと伝わる
18	肉付き払子		1	払子は僧が説法の際に持つ仏具(伝・馬の尾)。嘉暦2年(1327)、慈雲妙意が後醍醐天皇から賜ったものと伝わる。嘉永元年(1848)3月に氷見中町・稻積屋宗左衛門から國泰寺に寄付された
19	後奈良天皇口宣案(円通仏眼禪師)	天文14年(1545)9月12日	1	藏人頭右中弁藤原(勤修寺)晴秀→綱存(円通仏眼禪師)和尚
20	後奈良天皇綸旨(國泰寺住持)	天文15年(1546)10月9日	1	右中弁藤原(勤修寺)晴秀→27世雪庭(祝陽)禪室
21	正親町天皇綸旨(紫衣勅許)	天正4年(1576)9月20日	1	右大弁(藤原光宣)→29世嗣山(慶胤)和尚禪室
22	御水尾天皇綸旨(香衣勅許)	元和9年(1623)5月13日	1	右中将(藤原季俊)→32世越中国國泰寺住持英叔(宗雄)禪室
23	東山天皇綸旨(國泰寺住持職)	元禄12年(1699)5月14日	1	右少弁(藤原尚房)→37世天英(清竺)和尚禪室
24	中御門天皇綸旨(國泰寺住持職)	正徳2年(1712)8月27日	1	右少弁(藤原治房)→38世別伝(通識)和尚禪室
25	桃園天皇綸旨(國泰寺住持職)	延享4年(1747)12月4日	1	右少弁(藤原嘗房)→40世北溟(自薫)和尚禪室
26	光格天皇綸旨(國泰寺住持職)	寛政3年(1791)8月30日	1	左中弁(清閑寺昶定)→46世願海(恵行)和尚禪室
27	孝明天皇綸旨(國泰寺住持職)	慶応1年(1865)6月15日	1	右大弁(清閑寺豊房)→53世実応(是参)和尚禪室
28	『宝物什器台帳』	明治29年(1896)	1	
29	『宝物古文書等御届』	明治29年(1896)	1	
30	『國泰寺宝物什器控』	昭和19年(1944)	1	
31	『宝物什器明細帳』	近代	1	
32	『宝物控』	明治中期頃	1	
33	御綸旨箱		4	
34	案内札「勅願所 越中州國泰寺」		1	
35	案内札「勅書」		1	
36	菊御紋挾箱		1	
37	雲谷等益画《紙本墨画 馬鳥樓閣図屏風》	17世紀前半	1	江戸前期に活躍した画家で、長門国萩藩(現山口県萩市)御用絵師・雲谷等益(1591~1644)の水墨画屏風。父の等顔(1547~1618)は雪舟様式を継承し、主に中国地方で活躍した漢画の流派・雲谷派の創始者。『國泰寺宝物什器控』(昭和19年)に、「寺中第一の逸品、嚴重保管の事」とある。また明治29年の『宝物古文書等御届』には山岡鉄舟より寄付とある
38	伝雪舟画《芦雁図》		1	室町期に活躍した画僧・雪舟(1420~1506頃)作と伝わる。雪舟は個性豊かな水墨山水画様式を完成し、日本水墨画の大成者として、後世に多大な影響を与えた。『宝物古文書等御届』(明治29年)など各種の台帳に記載されている
39	伝狩野永真画《達磨図》		1	江戸前期に活躍した日本画家・狩野永真(安信。1614~85)作と伝わる。永真は探幽の弟で、中橋狩野家を継いだ。『宝物古文書等御届』(明治29年)には近藤昇之介より寄付とある
40	伝明兆画《寒山拾得図》		1	南北朝~室町期に活躍した絵仏師・吉山明兆(1352~1431)作と伝わる。中国・唐の禅僧・寒山と拾得を描いたもの。明兆は京都東福寺内で仏堂の荘厳などを行う殿司を務め、兆殿司ともよばれた。明治29年の『宝物什器台帳』など各種の台帳に記載されている

No.	資料名称	年代	点数	備考
41	絵葉書「國泰寺 天皇殿」(複写)		1	「大本山國泰寺絵葉書」(発行・國泰寺。1977～97年。当館蔵)より
42	絵葉書「國泰寺 月泉庭と方丈」(複写)		1	「大本山國泰寺絵葉書」(発行・國泰寺。1977～97年。当館蔵)より
43	絵葉書「國泰寺 観音堂」(複写)		1	「大本山國泰寺絵葉書」(発行・國泰寺。1977～97年。当館蔵)より
44	絵葉書「國泰寺 月泉庭と坐禅堂」(複写)		1	「大本山國泰寺絵葉書」(発行・國泰寺。1977～97年。当館蔵)より
45	絵葉書「國泰寺 放生池(龍淵池)と法堂」(複写)		1	「大本山國泰寺絵葉書」(発行・國泰寺。1977～97年。当館蔵)より
46	絵葉書「國泰寺 茶室(春樹庵)」(複写)		1	「大本山國泰寺絵葉書」(発行・國泰寺。1977～97年。当館蔵)より
47	絵葉書「越中氷見郡(西田)臨濟宗大本山國泰寺山門ノ景」(複写)	〔発行〕大正7～昭和7年(1918～32)頃	1	高岡市太田の西田地区にある國泰寺の山門を写した絵葉書。未使用。現在の山門は明治22～26年(1889～93)頃の建築で、写真当時の屋根は茅葺きであったことがわかる(その後本瓦葺きとなり、現在は桧瓦葺き)。山門の仁王像は、高岡の仏師・本保義平作
48	桃井香岳編集・発行『清泉の流』	〔発行〕昭和12年(1937)5月1日	1	國泰寺開山・慈雲妙意の略歴や同寺の歴史のほか、寺観(建築物)、寺宝、歴代住職一覧(慈雲～58世悅庵大喜)等の記載もある
49	湖海昌哉編著・稲葉心田発行『靈光国師』	〔発行〕昭和50年(1975)6月3日	1	國泰寺開山・慈雲妙意の伝記『清泉行録』を分かりやすく現代語訳したもの
50	寺号額「弘源寺」	寛政3年(1791)5月	1	氷見市小竹にある臨濟宗寺院・弘源寺の寺号額。天龍寺第221世・桂洲道倫(1714～94)書。弘源寺は慈雲妙意が諸国行脚の後、二上山中(摩頂山、小竹山とも)で禅の修行を始めた草庵跡、もしくは摩頂山東松寺跡の付近といわれる。裏面の墨書から、本寺号額は開山国師450年遠忌にあわせて加納村(現氷見市加納)の扇澤権六より寄付されたものとわかる
51	「弘源寺居屋敷百間一尺之図」		1	國泰寺前身の東松寺付近とされ、二上山山頂より北北西約1kmの摩頂山(氷見市小竹)にある弘源寺の屋敷絵図。本堂、納屋を含む寺域は黄色で色分けされ、面積は2,002歩(約6,618㎡)とある。平面図も付属している
52	初代大槌長左衛門作《達磨大師渡船像》		1	初代長左衛門(1631～1712)は、寛文6年(1666)京より藩主・前田綱紀に招かれ金沢に来た陶工。子孫は代々継承している(現在11代)。達磨大師は中国禅宗の祖とされるインド出身の僧。6世紀初めの60歳頃、航海に3年をかけて中国広州に上陸し、禅宗を広めたと伝わる。昭和38年、氷見の加納実氏から國泰寺へ寄付された
53	天目中峰禪師自銘禪板		1	中国・元の中峰明本禪師(1263～1323)自銘の禪板。付属の裂(袋)は、源頼朝の祈願所で鎌倉の補陀洛寺へ寄進した打敷と同じものと伝わる。裂袋の裏と箱には鎌倉・建長寺第218世・真浄元苗の詩が書かれる。禪板は明治13年(1880)2月に山岡鉄舟から國泰寺へ寄付されている
54	完堂文悦筆《松樹千年翠》		1	國泰寺第51世・完堂の書。「松の木は千年変わらず緑を保っている」という禅語から、世の中の新しいものや面白い物、変化していくものばかりに目を奪われがちであるが、変わらないもの、目立たないが確かなものにも真実があり、学ぶべき存在であることを表す
55	東照宮御垂範		1	徳川家康(東照宮)が、慶長18年(1613)5月に発したとされるキリシタン禁制に関する15ヶ条の法令。江戸中期以降、幕府の禁教政策が推進していく過程で創作され、全国に流布した。キリスト教は邪法とされ、彼岸や先祖の命日などに参詣しない者は宗門改所で吟味するなどある。加賀藩の臨濟宗の触頭であった関係で國泰寺に伝わったものと考えられる
56	金欄葵紋唐草文様七条袷袢		1	加賀前田家3代当主・前田利常の由来とされる袷袢。國泰寺では江戸期、將軍へのお目見得の際に住職が着用したものと伝えられる
57	國泰寺触頭文書留帳		1	國泰寺は加賀藩全域の臨濟宗の触頭(寺社奉行のお触を配下寺院へ伝達し、配下寺院の訴願等を奉行へ取り次ぐ役)であり、その業務上の文書を写した留帳。伝奏指出書、諷経方願書、托鉢方願書等

No.	資料名称	年代	点数	備考
58	諸堂破損に付当地并に京・大坂三箇所勸化願書案	享保17年(1732)8月	1	國泰寺から加賀藩寺社奉行宛。國泰寺では自力での諸堂修補は難しく、末寺の助力があっても再興は延びている。また去年冬の大雪で諸堂が破損したので、殿堂再興のための京・大坂での勸化(寄付集め)を願い出した書状案
59	祠堂銀元入年賦并利足半減に付願状	(宝暦～明和頃)辰12月	1	國泰寺から寺社奉行・寺西弾正(秀昶。在職1771～75)、永原求馬(孝乗。在職1760～77)、公事場奉行・伊藤内膳(惟純。在職1808～16)宛。加賀藩年寄・村井又兵衛より祠堂銀(先祖供養やお堂建立・修理のための基金)よりの補助を半減するとされたが、勸進で得た利益は役所へ差出し、本山相応の法式を執行してきたのでこれまで通りとしてほしいとの願状
60	参内御用に付通行添書覚		1	清閑寺殿役所執奏掛・青木治部大丞から宿々問屋船川渡役人中宛。國泰寺が参内御用につき上京するので通行の際は滞りなく人馬継立てするよう定めている
61	祠堂銀半減迷惑に付願状	[安永2年(1773)]2月23日	1	國泰寺から加賀藩寺社奉行・寺西弾正(秀昶。在職1771～75)、永原求馬(孝乗。在職1760～77)、公事場奉行・伊藤内膳(惟純。在職1808～16)宛。同寺第39世・万嶽性狄が拝借金を願い江戸へ出向き、全国での托鉢許可を願い出した。利益は差し出して建物を修復していたが、祠堂銀(先祖供養やその建物建設のために寄進された基金)の半減では迷惑であり、今まで通りに渡して下さるようお願いしている
62	祠堂金利息減少頼入状	安永7年(1778)11月	1	富山藩の杉村七郎右衛門、山本十蔵から西田國泰寺五ヶ院衆中宛。奥書は富田下総(家老)。利息は20両1歩が定めであったが、毎年12月に10両ずつ支払うこととなったことを示す書状
63	松源庵退院、弟子梵樹首座居置に付請書案	寛政5年(1793)正月	1	加賀藩寺社奉行・前田修理(知定。在職1759～60)、菊池大学(武昭。在職1790～95)、品川主殿(景武。在職1791～1804)宛。國泰寺触下寺院の金沢の松源庵古芳が、去年退院し無住になった。國泰寺の弟子梵樹を首座住職としてほしい願いが承認されたので、今後何があるかと責任を取るとの請合証文の案文
64	山門成就につき勸化願状	文政7年(1824)6月	1	國泰寺より大聖寺藩の大井司馬允、斎藤忠兵衛宛。國泰寺第38世・別伝通識は、享保19年(1734)及び明和3年(1766)の江戸及び加賀藩、富山・大聖寺藩領内での勸化(寄付集め)が許可され、仏殿(法堂)客殿は新築された。本史料では代々の住職は山門造営の志はあったが、日々の暮らしも差し支えるほどの「貧寺」であり、自力では難しいため大聖寺藩領内での勸化の許可を願い出ている
65	有賀直政250回遠忌木牌	嘉永4・5年(1851・52)	1	國泰寺に墓がある加賀藩士・有賀直政(?～1603)の250回遠忌に作られた木牌。黒塗りのものは嘉永4年で直政の戒名、金20両を納めたことなどが記される。白木のもとは同5年で、子孫の寛兵衛政方(算用場奉行など)が本来250回忌は今年であること、古希を迎えて先祖を詠んだ歌などを記している。有賀直政(有賀齋宗元)は美濃(現岐阜県)の人で、越前・朝倉義景や前田利家に仕えた。子の直治は高岡町奉行も務めた
66	古き立(建)物大破に付祠堂銀拝借願状	安政5年(1858)7月	1	國泰寺末寺の安川村(砺波市)薬勝寺、頭檀那与三兵衛、世話人と十郎らから御本山御役寮(國泰寺)宛。再建のため寺社の祠堂銀を借用したく願い出したもの
67	和宮様関東へ縁組御定め御達状	[万延元～文久元年(1860～61)頃]11月18日	1	吾木右兵衛大尉、河原東馬から國泰寺五院御中宛。和宮(1846～77。静寛院)は孝明天皇の妹で、5才で有栖川宮熾仁親王と婚約する。その後、江戸幕府の公武合体策により、第14代將軍徳川家茂(1846～1866)と結婚が決まった。本史料はそれを伝えたもの。和宮は文久元年(1861)10月京都を発し、中山道を通り、翌年2月江戸に到着、11日に結婚した
68	絵図「富山県氷見郡太田村太田國泰寺境内地」		1	國泰寺境内地の実測平面図と実測図が1枚にまとめられた絵図。実測平面図には、色別で「譲与申請地」(緑色)、売払申請地(黄色)、寺院境内地が点線で表されている。測地製図者・江崎芳太郎
69	「國泰寺建物総絵図」	明治14年(1881)9月	1	國泰寺の建物・敷地や境内地、耕地、山地、道路などが詳細に描かれ、色分けされた絵図。制作・小川理吉郎

No.	資料名称	年代	点数	備考
70	「國泰寺所有地境内外測量絵図」	明治14年(1881)9月	1	國泰寺所有の境内地のほか、山地(緑色)、開墾地(紫色)、耕地(黄色)、宅地(茶色)などが色分けされた測量絵図。当時の國泰寺周辺の土地の様子がうかがえる貴重な史料である。取調人・殿谷源平、高田長平。測量人・小川理吉郎
71	國泰寺山門(三門)絵図		1	國泰寺山門(三門)の絵図。縮尺25分の1。同寺の記録によると建造年は安永8年(1779)とあり、明治22~26年(1889~93)頃の改築とみられる。本図は2階建て現在の1階建てのものとは異なるが、当館蔵「西田國泰寺山門絵図」とも酷似している。江戸期、もしくは明治前期の改築前の構想図とも考えられる。末尾の墨書から、戦国時代末期以降氷見を拠点に活躍した宮大工集団で大窪大工・藤岡嘉兵衛が描いたものと分かる
72	山門地絵図		1	國泰寺山門の平面図。上図の付図
73	國泰寺本堂絵図		1	國泰寺本堂の絵図。縮尺40分の1。現在同寺の伽藍配置図に「本堂」の名称は見られないが、財産目録によると現在の大方丈のことと分かる。右図と同時期のものであれば、明治期の構想図とも思われる。本図も大窪大工・藤岡嘉兵衛が描いたものと分かる
74	本堂地絵図		1	國泰寺本堂(大方丈)の平面図。総間数16間(約29m)、梁間数13間半(約24.5m)と記載がある。上図の付図
75	越叟義格筆《銀椀裡盛雪》		1	國泰寺第54世・越叟義格の書。『碧巖録』の禅語で、白銀の椀に白い雪を盛ると一見椀と雪の見分けがつかなくなるが、別個のものであることをいう。越叟(松尾氏)は臨濟宗相国寺の越溪守謙に師事。明治7年(1874)、國泰寺に入る。明治維新以後、同寺は廃仏毀釈等の余波を受け荒廃するも、越叟は山岡鉄舟の援助を受け、同寺天皇殿の再建をはじめ諸堂の改築に尽力した。同16年(1883)、越叟は鉄舟が東京谷中に建立した全生庵の開山として招かれた
76	國泰寺住職申付状	明治8年(1875)11月25日	1	新川県(現富山県)より権中講義・松尾越叟(國泰寺第54世。1837~84)宛の住職任命状。権中講義は教導職の階級の一つ
77	権中教正補任状	明治15年(1882)7月21日	1	太政官より権少教正・松尾越叟(國泰寺第54世。1837~84)宛。権中教正、権少教正は教導職(明治5年に国民教化を目的に教部省に置かれた職)の階級の一つ
78	溪山人画《紙本彩色 鬼の念仏》		1	「本堂再建」と書かれた旗を背に、奉賀(加)帳(寄進帳)を持ち歩く鬼の姿
79	伝近藤勇所用紺糸威二枚胴具足	16~17世紀頃	1	新選組局長・近藤勇(1834~68)所用と伝わる当世具足。國泰寺、近藤共に親交のある山岡鉄舟(鉄太郎)が、幕府とも繋がりのある同寺に寄進したものと伝わる。明治29年『國泰寺宝物什器台帳』には「山岡鉄太郎寄付」とあるが近藤の名は無く、昭和19年『國泰寺宝物什器控』には「新選組隊(ママ)長近藤勇ノ著セシモノニテ鉄舟居士寄進ノモノ」と記されている
80	山岡鉄舟筆《野晒画賛》		1	山岡鉄舟(1836~88)の画賛。晩唐の詩人・陳陶の「隴西行」の後半部「可憐無定河辺骨/猶是春閨夢裡人」(憐れなるかな、無定河のほとりの骨は、故郷の若妻の夢に現れる人なのだ)と、髑髏が描かれる。鉄舟は屏風1,200双、掛軸・額など1万枚余を揮毫し、北陸の有志に國泰寺再興への勧進を呼びかけた
81	山岡鉄舟筆 扁額《般若心経》		1	山岡鉄舟が書いた般若心経。剣・禅のみならず書の達人でもあった。鉄舟の境地を示す。般若心経とは、主に葬儀・法要・僧侶の修行の三つの場面で読まれる般若經典の中の一つ。6世紀に中国の僧・玄奘三蔵によってインドから伝えられ、「大般若波羅蜜多経」、略して「大般若経」を作った。この經典の重要な部分を抜粋し、短くしたものが般若心経である
82	山岡鉄舟愛用 ダルマ筆		1	箱書きによると、元々この筆は山岡鉄舟の所蔵。その後、鉄舟の遺品として天龍寺第236世管長・滴水宜牧、同寺237世管長・龍淵元碩、その後國泰寺第57世龍水英堯へと受け継がれた

No.	資料名称	年代	点数	備考
83	西郷隆盛書簡（得 藤長宛）	明治2年(1869)3月20日付	1	維新三傑の一人・西郷隆盛(1828～77)から奄美大島の島役人・得 藤長宛の書簡。西郷が慶応4年(1868)2月に戊辰戦争で新政府軍の東征大総督府参謀として江戸へ進軍して以降、翌年の鹿児島帰郷、8月の再出陣（北越戦争）、9月の庄内藩討伐、11月の再帰郷、翌明治2年2月の参政任命等を伝え、そして島に残した2人の子供の世話を謝している。追伸では弟吉二郎の北越戦争での戦死を嘆いている。旧幕臣・山岡鉄舟の寄進と伝わる
84	亮敬画《雪門玄松 似顔絵》	昭和24年(1949)4月	1	國泰寺第55世・雪門玄松(1850～1915)の似顔絵。雪門は越叟の志を継ぎ、明治21年(1888)同寺天皇殿、同26年に禅堂の再建を成し遂げた。また、仏教学者・鈴木大拙、哲学者・西田幾多郎の師でもある
85	國泰寺住持職事執務状	明治17年(1884)9月15日	1	臨濟宗相国寺から出された國泰寺第55世・雪門玄松(1850～1915)宛の住持職任命状
86	水上勉著『破鞋－雪門玄松の生涯－』	〔発行〕昭和61年(1986)10月17日	1	雪門の波乱万丈で謎に満ちた生涯を描いた小説。著者は雪門が晩年を過ごした現福井県おおい町出身で、少年期に京都の禅寺で修行経験がある
87	瑞雲義寛筆《山是山水是水》		1	國泰寺第56世・瑞雲（梅田氏。?～1909）の書。『雲門廣録』等に見られる禅語で、山には山の個性があり、水には水の個性がある。その2つの個性がうまく調和し、自然を形成していることを表す。瑞雲は、これまでの臨濟宗相国寺派から新たに臨濟宗國泰寺派として独立を果たす明治38年(1905)、初代國泰寺派管長に就任した
88	龍水英堯画賛《人の橋を渡る図》		1	龍水（佐竹氏。1857～1934）は國泰寺第57世。座頭（盲人）が橋を渡る姿を描く。龍水は禅会を通しての布教活動だけでなく、施薬・点灸をもって大衆の教導にもあたった。「世の中は／常に／座頭の／まる木はし／渡る心で(で)／わたれ／世の人」
89	龍水英堯所用 硯	大正元年(1912)8月	1	國泰寺第57世・龍水所用の硯
90	相国寺より所轄の儀に付了承状	明治7年(1874)10月5日	1	國泰寺が臨濟宗相国寺派に属するよう指示する申渡し状。寺法式などは従前の通りに執行するよう命じている。國泰寺は明治5年(1872)10月の「一宗一管長制」の発足に伴い、同6年から臨濟宗相国寺派に属することになった
91	借材元利仕出帳	明治9年(1876)	1	國泰寺副司寮の明治6～8年(1873～75)までの借入、明治9年までの利子の記録
92	派名復帰願につき内務省差出控	明治12年（1879）	1	明治6年(1873)に臨濟宗法灯派國泰寺は相国寺派に組み込まれ、法灯派復帰を願った資料。同寺の縁由（由緒）、派名復帰添願、派名復帰並びに内務直轄願等の書類。いずれも内務卿・伊藤博文(1841～1909)宛
93	本堂修繕山門再建に付金一封下賜状	明治16年(1883)6月21日	1	宮内省（明治天皇）から國泰寺宛。本堂（大方丈）と山門再建にかかる金一封（100円）下賜状。明治維新以後、廃仏毀釈等の余波を受け荒廃した國泰寺のため、剣・禅のみならず書の達人でもあった山岡鉄舟は、同寺54世・越叟義格(松尾氏。1837～84)の諸堂改築の志に賛同し、屏風1,200双、掛軸、扁額など1万枚余を揮毫した。このことが明治天皇に伝わり、國泰寺へ下賜された
94	本堂並山門再建に付管下勸化御達願案	明治16年(1883)10月	1	國泰寺檀家総代・南清太郎等8名から初代富山県令（知事）・国重正文(1840～1901。在職1883～88)宛。國泰寺本堂（大方丈）と山門再建のための勸化（勸進。寄付金募集）を行うための各部役所や戸長役場へのお達し願いの案文
95	本堂修繕山門再建に付宮内省・内務省下賜金控え	明治16年(1883)	1	本堂（大方丈）と山門再建にかかる下賜金控え。宮内省からは金100円、内務省からは金150円が國泰寺へ下賜され、旧幕臣で書家の山岡鉄太郎（鉄舟）と陸軍軍人・鳥尾小弥太(1848～1905)からは金100円が寄付されたことが分かる
96	禅堂創立募縁簿	明治25年(1892)12月	1	國泰寺の禅堂創立のために集められた寄付金の帳簿。寄付者は寺院のほか、第4代富山県知事・徳久恒範(1844～1910。在職1892～96)、高峰讓吉の父・精一、高岡市伏木の堀田善右衛門ら有志者の名前がみられる

No.	資料名称	年代	点数	備考
97	決議書并所轄分離綴誓約書のうち「請願書」	明治30年(1897)5月17日	1	同綴には、興国寺(富山市)・誓度寺(氷見市)・菓勝寺(砺波市)住職ら一派独立の決議書(明治30年7月4日付)や、請願書(同年5月17日付)、興国寺・定林寺(七尾市)・江雲寺(ママ)(高岡市)(同年9月23日付)、金沢国泰寺・全生庵(東京谷中)・願成寺(珠州市)らの「所轄分離主張誓約書」(同38年)が綴られ、所轄分離の動向が伺える
98	救助金施与につき木杯下賜状	明治34年(1901)12月10日	1	第9代富山県知事・檜垣直右(1851~1929。在職1900~1902)から國泰寺第56世・梅田瑞雲宛。明治34年(1901)6月15日に起きた氷見町での出火の際、國泰寺が罹災貧民を救助したことへの下賜状
99	國泰寺分離の件等書簡合綴のうち南弘書簡	明治期	35	國泰寺檀家の岩間家(氷見市仏生寺)出身で南家(高岡市中川)の官僚・政治家の南弘(1869~1946)等から養父・南兵吉、及び國泰寺第56世・梅田瑞雲宛等の書簡がまとめられている。國泰寺が臨濟宗相国寺派からの所轄分離・独立にあたり、内務省の見解等の記録もあり、弘が尽力したことが伺える
100	所轄分離申請書等合綴のうち「所轄分離申請書」	明治34年(1901)7月27日	1	明治30年(1897)9月30日付「所轄分離承諾願」(相国寺派管長宛)、同31年9月1日付及び同年10月5日付「所轄分離再願書」(相国寺派管長宛)はいずれも却下されたため、同年10月18日付で内務大臣侯爵・西郷従道(1843~1902)宛に歎願している。明治34年7月27日付「所轄分離申請書」では、國泰寺第56世・瑞雲義寛(梅田氏。?~1909)のほか、壇徒総代・南兵吉、信徒総代・八坂金平、堀田善右衛門、木津太郎平、稲垣示、堀二作らの署名がみられる
101	所轄分離請願書等合綴のうち「所轄分離請願書」	明治38年(1905)3月7日	1	臨濟宗相国寺派管長・中原東嶽宛。明治38年(1905)3月7日付の申請に対し、同年同月9日付で許可、同年11月30日付で内閣総理大臣伯爵・桂太郎(1848~1913)が國泰寺分離の件を奉じている。その後、同年12月15日付で「所轄分離大本山復古願」が内務大臣男爵・清浦奎吾(1850~1942)より認可、同年月16日付で「管長就職認可願」が認可された。明治5年10月の「一宗一管長制」の発足に伴い同6年から臨濟宗相国寺に属してきた國泰寺は、「國泰寺派」の大本山として独立を果たすこととなった
102	独立奉告式及び授戒会四部録会名簿	明治39年(1906)9月	1	明治39年(1906)9月6日(同月8日の誤りか)の復古独立奉告式役配、式次第、祝辞、授戒会役配について記載された名簿。式には富山県知事など700余名が参加したとある
103	山林下附御願書并に理由書	大正3年(1914)3月18日	1	國泰寺前住職・梅田中蔵(瑞雲義寛)や南兵吉ら4名から國泰寺第57世・龍水英堯(佐竹氏。1857~1934)宛。理由書によると、この山林は明治40年(1907)に高峰讓吉(在米国)が、國泰寺住職の梅田に隠居後の生活のために寄進したもので、梅田が南夫妻提供の隠居地で瑞雲寺(高岡市須田)を創建したことから、山林を同寺の財産として名義変更してほしいと伝えている
104	妙音教会趣意、規約等綴	近代	1	妙音教会趣意、妙音教会規約、財産登記綴(内務省社寺局・稲垣宗正宛)などが綴られたもの。明治25年(1892)虚無僧尺八の妙音教会が設置され、法要の時には読経と法竹(尺八)の合奏がある。國泰寺は開山の師・法灯国師が中国・宋から連れて来た虚無僧(普化宗の僧)ゆかりの法灯派の本山であったこともある。現在でも毎年、6月2日・3日の開山忌には20名ほどの虚無僧が集まり、國泰寺境内に妙音が響き渡る
105	密記他方応請諸般記		1	國泰寺における口上、献立、開講、齋会、諸寮道具等の記録
106	本紅地七宝紋錦金襴切交七条袈裟	昭和12年(1937)	1	國泰寺檀家の岩間家(氷見市仏生寺)出身で南家(高岡市中川)の養子となった政治家・南弘(1869~1946)が、明治天皇の霊前供養、後醍醐天皇600回忌などのため同寺に寄付した袈裟
107	富山県知事・土岐銀次郎香華料包紙	昭和12年(1937)5月1日	1	土岐銀次郎(1894~1976)は第26代富山県知事(在職1935~38)。後醍醐天皇600年記念御忌のため
108	後醍醐天皇600年記念御忌執行に付香華料下賜状	昭和12年(1937)5月1日	1	宮内省から國泰寺宛に金一封(100円)が下賜された

No.	資料名称	年代	点数	備考
109	國泰寺派単独宗制認可願状並びに上申書	昭和16年(1941)11月	1	明治38年(1905)の分派独立後における國泰寺派単独宗制認可願状。檀徒総代・古戸孫右衛門等4名、信徒総代・堀埜与右衛門等4名から文部大臣・橋田邦彦(1882～1945)宛。上申書は國泰寺第58代・悦巖大喜より申請されている
110	新宗制認可報告慶讃大法会祝辞	昭和17年(1942)6月1日	1	第28代富山県知事・町村金五(1900～92。在職1941～43)による祝辞。大戦争の開始、銃後一般の奮起を促す時局の対応、東亜諸民族救済指導の尽力の信念を陳べている
111	梵鐘保存願	昭和17年(1942)10月30日	1	國泰寺第58世・悦巖大喜ほか檀徒総代等計5名から第28代富山県知事・町村金五(1900～92。在職1941～43)宛。昭和16年(1941)9月の「金属類回収令」に対し、國泰寺の梵鐘(1690年作。総丈122cm、口径71cm)は由緒あるものなので保存を願い出ている(現存)
112	譲与申請書類のうち「譲与申請書」	昭和23年(1948)4月26日	1	國泰寺第59世・大眉敬俊(釈氏。1882～1964)から大蔵大臣・北村徳太郎(1886～1968)宛。同寺本堂(大方丈)・仏殿(法堂)・位牌堂等の敷地、参道、立木等の国有財産の譲渡申請書のほか、社寺等国有境内地譲与許可証、誓書(写)などが綴られている
113	悦巖大喜画賛《観音菩薩像》		1	國泰寺第58世・悦巖(勝平氏。1887～1944)の書。悦巖は昭和9年(1934)國泰寺管長に就任、同12年(1937)の後醍醐天皇600年遠忌に際し、天皇殿の修補、大庫裡改築、小書院建築、諸堂修理を行った
114	江嶽義南筆《遺偈》		1	國泰寺第60世・江嶽(飯塚氏。1883～1953)が臨終の際に残した詩句。江嶽は昭和27年(1952)國泰寺管長に就任し、翌28年在職中に死去した
115	大拙宗演筆《涛声》		1	國泰寺第61世・大拙(寺本氏。室号・半雲室。1899～1973)の書。昭和28年(1953)國泰寺管長に就任し、同38年退任
116	心田元明筆《六字名号「南無阿弥陀仏」》		1	黒地金泥書。國泰寺第62世・心田(稲葉氏。1906～86)の書。境内・伽藍などの改修整備に努めるとともに、各地で心田会・坐禅会などの法座を開くなど、広く伝道教化活動を行った

※資料保存のため一部展示替えをすることがあります。本リストの内容は実際の展示と異なる場合があります。

計116件154点

(公財) 高岡市民文化振興事業団 高岡市立博物館 (富山県高岡市古城1-5)

TEL 0766-20-1572 FAX 0766-20-1570 <http://www.e-tmm.info/>